



平成23年新潟・福島豪雨災害の特徴 —集中豪雨の雨域拡大と“自然との共生”の必要性—

2011年7月28日から30日に、新潟から福島にかけて東西に伸びる前線に、湿った空気が南から西北に回りこみ越後山脈にぶつかって豪雨となり、山間部を中心として大きな水害をもたらした。



明治以降最大となった阿賀野川洪水（馬下橋地点、2011・7・30、大熊撮影）

この雨量は五十嵐川上流の笠堀（国）で1006mm、只見（気）で711mmを観測しており、まるで台風が直撃する紀伊半島や四国並みの豪雨となった。等雨量線図から300mmを超える雨域をみると、北東から南西にかけて約100km、北西から南東にかけて約70kmと数千km²の大きさに達している。2004年7月13日の五十嵐川・刈谷田川豪雨災害での雨域がせいぜい30km×20kmの大きさであったのと比較して、一桁大きい雨域であった。信濃川の流域面積が約12,000km²であるので、その雨域は大河川を覆う規模であったといえる。今までの集中豪雨の規模はせいぜい数百km²であったので、大河川では問題にならなかったが、これからは大河川でも極端に大きな洪水の発生可能性が高くなったといえる。

事実、今回の豪雨で、阿賀野川は馬下で10,000m³/sを越え、明治以降最大の洪水となっている。また、魚野川でも明治以降最大流量に達

し、信濃川は千曲川流域での出水がなかったので小千谷で8000m³/s弱の中洪水であったが、大河津分水から下流でも五十嵐川など史上最大の洪水であり、信濃川下流も帝石橋で3800m³/sを超える大洪水であった。ただ、今回、越後平野内では、本川の水位が高く支川の排水ができない内水被害が発生したが、大氾濫はなかった。

越後平野に流れ込む河川がすべて大洪水になり、越後平野全域を大水害に陥れた事例として、横田切れで有名な明治29（1896）年7月水害がある。今回はそれから115年ぶりの大洪水であり、仮に大河津分水や、阿賀野川と小阿賀野川を分離した小阿賀水門などがなければ、越後平野は水浸しとなり、明治29年水害の再来は疑いないところであった。今回は、明治以降の100年に及ぶ河川改修の成果が発揮されたといっていいたいだろう。

しかし、山間部では、山崩れの多発とともに、小河川が大出水し、さまざまな水害を発生させた。今回の被災地は広域に及ぶため、すべてを見て回ることにはできていないが、川の外カーブで護岸が浸食され、堤防が壊れたケースが目立った。また、山間部の河川といえども、川沿いに開発された水田や集落の被害が目立っている。要は、かつて川の領域であったところを開発して、川の領域を狭めたが故に被害にあっているという構図である。こうしたところは、単純に元の状態に復旧するのではなく、川幅を広げ、川の領域を増やして護岸するという方策を取れば、今後の被害を軽減できると考える。すでに減反政策が始まって40年以上がたち、集落の過疎化も目立ってきた。このような方策の採用は十分可能であると考えられる。

このことは、何も山間小河川だけでなく、平野部の大河川でも同じであり、人間の営為が川の自由を奪っており、そのしっぺ返しとして水害を受け

■水辺レポート



洪水を見事に流下させている大河津分水（2011・7・30、大熊撮影）一手前に見えるのが現可動堰、奥に見えるのが完成間近の新可動堰—

ている。今までは、自然を、川を克服して、人間がコントロールできる領域を増やしてきたわけであるが、それがそろそろ限界に達し、自然からの反撃が大きくなりつつあるということである。その顕れの一つが3・11の津波による巨大防潮堤の破壊と市街地の壊滅であろう。

ちなみに、9月はじめに紀伊半島を襲った台風12号では、今まで1000mm程度あった雨が2000mmにも達し、雨域も数千km²を超えている。この災害では、17の天然ダムを出現させ、特に、熊野川支川・相野谷川で高さ9mに及ぶコンクリート製の巨大輪中堤が破壊した。紀伊半島では明治22(1889)年に53の天然ダムを出現させた激甚な水害が発生しており、今回の災害は122年ぶりの大災害であった。

このようにハード施設が打ち破られる状況が多発している。新潟の場合、大河津分水を始め、大堤防と堰・水門施設による治水システムはうまく機能してくれたが、これらがいつ打ち破られるとも限らない。これからは人口減少が進み、人間の領域を狭め、自然の領域を増やすことが可能になる。ここに本当の意味での“自然との共生”が始まるのではないかと考えている。

大熊 孝
(NPO 法人新潟水辺の会代表・
新潟大学名誉教授)

2011 つづくり市民会議 開催レポート

「2011 つづくり市民会議」は10月1日(土) 13時30分より、東区プラザホール(旧イトーヨーカドー新潟木戸店)にて150名を超える参加者(スタッフ含)を得て開催されましたが、今回は本年3月11日に発生した東日本大震災をふまえて、宮城県気仙沼湾の牡蠣養殖業者で「森は海の恋人」運動提唱者の畠山重篤さんをお招きし、「巨大津波と向き合っ」と題する講演を柱に据えた記念すべき「つづくり市民会議」となりました。



甚大な被害に遭っても海の豊かさがあるから気仙沼で暮らせると語る畠山重篤さん

大熊 孝会長は開会挨拶で、「3・11以後、私たちには新しい生き方が問いかけている。津波も豪雨も自然は怒りまくっているように見えるが、これから自然とどうかかわっていくか考えていかなければならない。つづくり市民会議の活動も10年以上経過してきたが、今後の活動の方針や川の改修工事のあり方をどう進めていったらよいのか、“つづくり・魅力づくりプラン2010”の策定を昨年から進めているので、その具体化に向けて議論を深めてゆきたい。本日の講演にはそのヒントがあると思うのでご清聴をお願いします。」と参加者に語りかけました。

畠山重篤さんが講演で語られた要旨は、次のとおりです。

1. 津波の第2波は10mを超える水の壁となって押し寄せ、その光景は映画の天地創造を連想させ

た。高台にある我が家より下の建造物はあっという間に流された。

2. 気仙沼の街は水攻めの後火攻めに遭い、亡くなった人が1,000人を超え、500人近くが行方不明となり、体育館がお棺で埋まっていた光景は忘れられない。93歳の母親を街中の施設に預けていて津波で亡くしたことが、慙愧^{ごんき}に耐えない。
3. 津波は地震と違ってケガ人は少ない。生か死かに分かれる。生死の分かれ目は「高さ勝負」だ。平地で海から離れようとしてもダメだ。「4階以上」無いと安心できない。
4. 私の地元では一生に二回津波に遭うと言われているが、なぜそんなところに住むのかと問われれば、「目の前の海があまりにも豊かだから」と答えるしかない。私の地域の住民には、津波や海を恨む心情は無い。津波はしかたがないと諦める気持ちがある
5. 私の家では4代100年に渡って牡蠣の養殖業に取り組むことになるが、私が一番心配したことは、「海は壊れてしまったか?」ということだった。しかし、巨大津波から2ヶ月後には海に続々と生き物が戻ってきて、息子たちにも牡蠣養殖を再開する勇気が湧いてきた。それから養殖のイカダ作りを進めている。
6. 海がよみがえった最大の要因は、海に注ぎ込む大川と背景の森林が健在で、海の生き物の基盤となる植物プランクトンに光合成を促進する鉄分を供給してくれているからだと確信している。海の濁りが落ち着いた2ヶ月後には光合成を開始したのであろう。
7. その他新潟への提言として、次の二つの話がありました。
 - ① 県の水産業予算は少ないと思う。海のおかずが沢山獲れれば米の消費は進む。
 - ② 通船川のヘドロは細菌に食わせて改良す

べきだ。そのためには鋼鉄と炭素の組み合わせが有効である。



小学校での取り組みを発表する東山の下小学校の児童の皆さん

「2011 つうくり市民会議」は講演の後、

- (1) つうくり市民会議からの提案 (川づくり案 2010)
- (2) 「東山ノ下小学校と通船川」(児童による活動発表)
- (3) 通船川・栗ノ木川の記憶風景 (デジタルアーカイブス)

などが行われ、16時30分に閉会しました。

世話人 佐藤 哲郎

2011 新潟水辺シンポジウム “恵みの川、災害の川、エネルギーの川を考える”のお知らせ

日時：11月26日(土) 13:15～16:40

内容：

基調講演「サケは海からの贈り物～川は海と陸をつなぐ

コリドー(回廊)」帰山 雅秀氏(北海道大学教授)

第2回「信濃川・環境大河塾」報告

パネルディスカッション「川の恵みはどのように分け合い、災害をどのように避けるべきか!」

参加費：無料

会場：新潟国際情報大学新潟中央キャンパス

(新潟市中央区上大川前7)

主催：NPO 法人 新潟水辺の会

後援：新潟県、新潟市、長岡市、十日町市、新潟日報社、信濃毎日新聞社

問合せ：電話 025-264-3191 ファックス 025-264-3260

メール：info@niigata-mizubenokai.org

ホームページ：http://niigata-mizubenokai.org/

日本の水力発電ダムについて (第2回信濃川環境大河塾にて)

3月11日の東日本大震災により、福島第一原子力発電所が機能不全となり、発電所周辺の福島県民は、長期間の避難を余儀なくされています。そのような中でより安全でクリーンなエネルギーとして水力発電が注目を集めています。

新潟水辺の会は、8月23～24日の日程で第2回信濃川環境大河塾を実施しました。初日は信濃川、千曲川、犀川に位置する7つの水力発電ダムと発電所を見学し、翌日は見学を踏まえて「川やダムへの価値転換」のミニ講演や「自然災害・エネルギー（水力発電）・河川環境」をテーマにワークショップが実施されました。

一般の人々は、水力発電ダムといってもどのような構造や仕組みか、よく解らないところです。そこで、初めに東京電力(株)の方から水力発電ダムについて解説をしていただいたので、ここに紹介します。

1. 水力発電のしくみ

水力発電のしくみは、高いところから水が流れ落ちるとききの力を利用し、水車を回転させて電気を作っています。その方式は4種類あります(図1)。

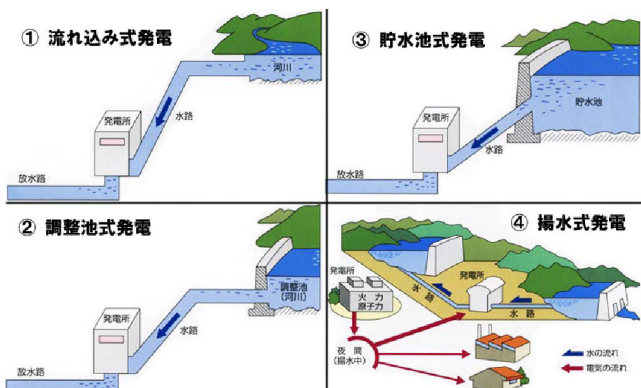


図1. 水力発電の方式 (東京電力ホームページより)

①流れ込み式発電：川の水をそのまま利用するため、豊水期と渇水期の水量変動で発電量も変化します。

②調整池式発電：川や取水水路の途中に調整池を造り、水量を調整して発電する方式で、1日あるいは

は数日間の発電量をコントロールすることができます。

③貯水池式発電：調整池より大きな貯水池に雪解け水や梅雨、台風の雨水を貯め、渇水期にも発電利用ができます。

④揚水式発電：電気エネルギーは、貯めておくことができないので、夜間の余った電気でポンプを動かし、下から水を上の貯水池に揚げる方式で昼間にまた発電を繰り返します。

2. 水力発電の歴史

水力は水の力を動力に利用するもので、古代から水の力を水車によって得た動力で製粉、紡績などを行っていました。

水力発電が世界で最初に行われたのは1878年、イギリスのウィリアム・アームストロングが屋敷へ電気を引いたのが最初です。それは屋敷の絵画展示室が昼でも薄暗く、招待客が夜でも絵画を閲覧できるようにと、1km離れた川に高さ10mのダムを個人で建設して電気(発電量4kw)を引きました。

日本では、明治21年(1888年)宮城紡績会社で自家用水力発電が設置されたのが最初です。

一般営業用としては、明治24年(1891年)琵琶湖疏水の落差を利用した蹴上水力発電所が世界最初です。この電力は、京都市内の街灯や明治28年に日本最初の路面電車に供給されました。

この時、関東ではドイツから50Hzの発電機が、関西ではアメリカから60Hzの発電機が輸入されたことから現在も東日本と西日本で2つの周波数が存在しています。

3. 日本の電気エネルギー事情

電気は使いやすいエネルギーとして、毎年その消

費量は伸びています。では日本の電力エネルギー源はどのように確保されてきたのか。

日本に発電所が登場してからは、東京を中心に急速に普及していきます。その頃は水力発電が主流で、水主火従の時代であったが、産業の発展に伴い電力需要が伸びてくると、大容量火力発電所が多く建設され火主水従となりました。

その後、原子力発電が始まった頃、昼間と夜間の電力需要の格差拡大が問題となっており、原子力や石油での発電高効率化による運用から、夜間の余剰電力は揚水発電所の揚水運転に供給するようになり大規模な揚水発電所が建設されました。

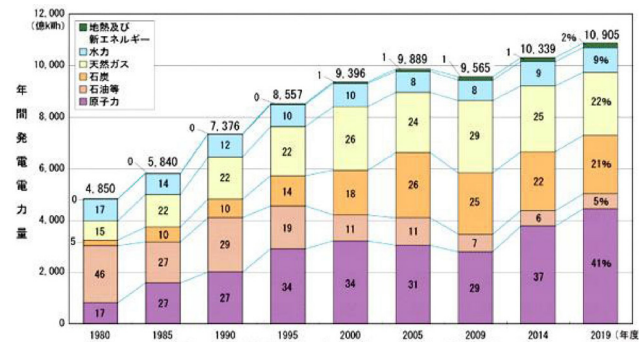


図2. 電源別発電量の実績と予測 (グラフ内の数値は%) (出典:「原子力・エネルギー」図面集 2011 1-19)

1970年代は発電量の60%以上が石油によるものでしたが、石油危機を契機に脱石油が図られ、近年(2009年)石油7%、水力他9%、石炭26%、LNG(液化天然ガス)29%、原子力29%(電源別発電量の実績と予測から)となっています。

そして、2019年には原子力が41%、LNG22%、石炭21%、水力他11%、石油5%に推移すると予想しています(図2)。

しかし、この度の3・11大震災により、この予測数値は、かなり変わってくるものと思われます。

4. 電気の1日の使われ方

1日の電力の消費量は、季節によって変動するが、一般的には図3のような傾向にあります。

即ち、昼間にピークとなって夜間にはピーク時の約半分ほどになることから余剰電力が揚水発電に利用されています。

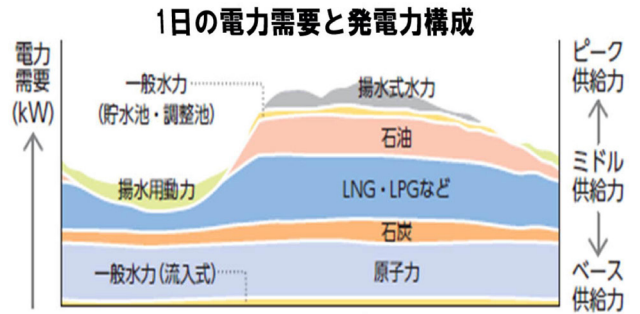


図3. 一日の電力需要と発電力構成 (東京電力ホームページより)

5. 電気の年間の使われ方と年度別の推移

1960年代は年間を通してほぼ一定の需要状況でしたが、高度成長期を経て電化製品の普及が進むに従い7~8月のピーク需要が顕著になっています。合わせて年間の電力需要も増加していましたが、1995年以降になって各分野における省エネルギー化が進み、電力需要の増加傾向は頭打ちとなり7~8月をピークとする傾向で、ほぼ毎年同じ使われ方を示しています。(図4)

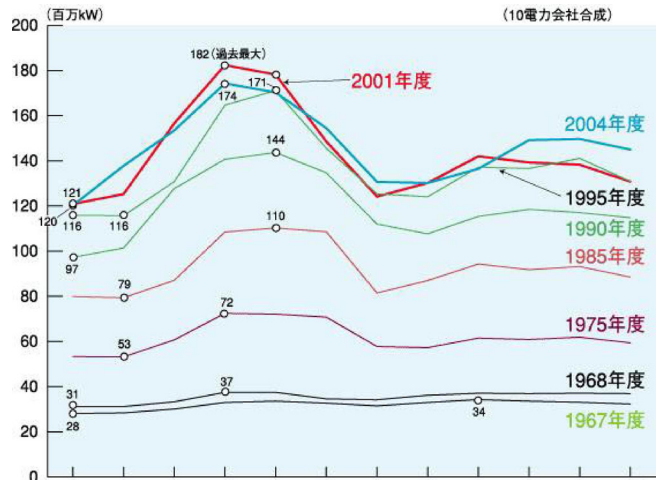


図4. 年間の電力使用量 (電気事業連合会調べ、注) 1975年以前は9社 (出典:資源エネルギー庁統計表)

3・11の大震災を契機に、一層省エネルギー化が各分野において促進されると共に電力構成も脱原子力へ変化してくると予想されます。

世話人 山岸 俊男

report 04 水と土の芸術祭 2012 に向かって想うこと

私は現在、公演とワークショップのため、三週間ニューヨークに滞在している。ここは、ニューヨーク、ブルックリン・ウイリアムズバーグ、イーストリバー沿いの、元、工場地帯だった場所だ。1980年代末、マンハッタン島の街を建て変えるために一掃され、はじめられた多くの人々がこのブルックリンに移住した。様々なタイプのアーティストが空き家や空き工場を作品制作のアトリエとして活動し始めた。そのうちに画廊も増え、手作りの洋服屋、家具屋、古着屋、アジア食が合体した食堂、飲み屋、カフェがその経営者のセンスでいろいろに建ち並び、村のような街となっている。現在はブルックリン全体に画廊がきつと200くらいはあるだろうし、それ以上の数のアーティストのアトリエ、ワークショップがあるのではないだろうか。



イーストリバーでの眼を閉じて場所を感じるワークショップ

夏の間の週末には現地でする人々の賑わいを求めて、自分たちで企画する小さなフェスティバルが通りを囲む。それはコンサートであったり、ダンスパフォーマンスであったりもするが、様々な通りのファッション関係の店が連帯し、訪れる人々をもてなす工夫をして町を賑わす一日もある。ある時は通りがこどもたちのための遊び場になる。もともと低所得者の移民の街はプエルトリコ人やドミニカ、メキシカンなど、南米系のスパニッシュで溢れる通りや、ポーランド人、ロシア人、ユダヤオーソドックス、と、通りごとに顔が変わっていくのが面白い。なんというか、民族の種だけではなく、様々な層の種とでもいうか、その共存の有りよう

がすごく頼もしい。英語の発音や言い回しも人それぞれでずいぶん違うが、みんな構わない。



水と土の芸術祭 2009 より C. オフラハラ作品
「Tears of my father」(巻・福井)で踊る(写真 風間忠雄)

さて、来年の水と土の芸術祭 2012 のディレクターをお引き受けした。前回の水と土の芸術祭を通して、新潟市の様々な地域の面白さに出会った。川沿いを辿って新潟の町と空を眺める楽しさに感動し、それを通して思いがけない瞬間の美しい景色にも出会った。川を通して町、集落が出来上がり、川の氾濫から土地を守りたい一心で、多くの獅子舞や芸能がそれぞれの地域に受け継がれてきたことも知った。様々な排水機場を訪ねることで、新潟の湿地での労働の歴史に改めて目覚めた。その中にはそのことを私たちに呼び起こす優れたアート作品もあった。芸術祭はあくまでもきっかけであると思う。私たちの日常がもっと生き生きとするために。生き活きとした互いのコミュニケーションを取り戻す。アートの中に身を置くことで、私たちが自分の感覚を総動員して、ここに居ることを実感する。アートは私たちの中にある身体感覚を育むと信じていたい。



私は今回の芸術祭を通して、都市が大きくなることで忘れられた、あるいは失いつつあるコミュニティの感覚を取り戻す、システムに頼らず自らのからだをもって知覚し、直観し、思い巡らす感覚を取り戻すべく、大いなる実験の場となることを望む。現代アートは解釈しにくくわかりづらいというが、私たちは説明に頼りすぎているだろうか？自分自身の想像力を最大限に発揮しているだろうか？そして、自然と共生することを知ることが、ここに存在し生きている私たち自身のからだの感覚が生き返ることを感じることもある。



水と土の芸術祭 2009 より 遠藤利克作品「氾濫」(旧亀田浄水機場)で踊る (写真 風間忠雄)

新潟の人々は様々な災難に必死に無言で堪えてきた。新潟の風土はそれを私たちの身体に強いてきた。それを身体の中に飲み込んで生きてきた。だから、新潟の人は粘り強く、懐が深いとも思っている。それが便利になり、生活しやすくなることによって、その身・体が忘れ去られようとしていないか。人々が環境と共存して生きるにあたって、生命の積み重ねの中の記憶を持って、環境に対して謙虚に立ち向かうと共に、それを自分たちの力として自分の身に入れることが必要だ。

そして、新潟の人々は自分をもっと楽しんでもいいのではないかと思う。当たり前になんかことをやってもいいのだといえるような時間と空間が現れてきたらいいと



水と土の芸術祭 2009 より 新通保育園 泥ん子祭り「こどもの大地」堀川久子と泥だらけ舞踏団 (写真 風間忠雄)

思っている。これまで、祭りは誰かが行うものだった、それに参加するとかしないとか、。しかし、実は誰が言い出してもいい。そんな余裕も実は含みたい。一人では完全足り得ない私たちは、何かの一部として常に機能している。中心は常に動く。ある日はどこかが、ある日は誰かが、そんな大らかで、互いに受け入れられる6ヶ月間のこの祭りの環境づくりができたらいのだが、。そしてアートは利用するものではなく、私たちがアートを育てることでもある、それを支える感覚、自由さを育てることでもある。それが共に生きることだ。この新潟市に生きる人たちがこの芸術祭を通じて、一歩も二歩も踏み込んで自分の町を自分の体で楽しむ。様々なジェネレーションの良さを踏まえて、若者たちが自由に自分たちのことを発表できる環境づくりと、真の共存にも向かって。私はそんな人々の間に立ち、その間をつなぐことができれば、と想う。芸術祭はその楔でありたい。

騒音と忙しさの中に暮らすニューヨークの人たちが、夕暮れ時になるとイーストリバーの川沿いにやって来て、川面の流れに身を揺らし、川向こうの空を無言で眺めている。たとえば、川と共に生きてみることに。私たちの体の中にある自然に向かい、そのことを知恵として受け取る時だ。

皆さんのやってみたいこと、小さなことでもいい、ぜひ提案してください。凝縮された新潟市民の協働作業の祭りです。

堀川 久子 (ダンサー・会員)

注：からだをあえて からだ、身体、体と分けて使いました。

report 05
水と土の芸術祭 2012 シンポジウムについて
第一回シンポは今年 12 月 11 日!

来年7月から始まる「水と土の芸術祭 2012」では、「自然との共生」を考える連続シンポジウムを開催します。総合コーディネーターは、水辺の会代表の大熊孝先生です。今年の12月から、来年2012年の11月までの間、全部で約5回開催する連続シンポジウムの共通テーマは、「自然との共生——人・まち・地域の自然力をいかす」。このテーマを掲げるにあたり、次のような問題意識を持っています。



水と土の芸術祭 2009 作品

王文志 Water Front——在水一方（撮影：五十嵐政人）

制御しきれない自然の威力が目撃の当たりになった東日本大震災。以後、近代的科学技術への過信が無かったか、自然を蔑ろにしていなかったかどうか、問われているのではないのでしょうか。

本来、人は水と土、自然の恵みなくして生きていくことはできません。しかしそれが忘れられ、一方的に自然の恵みを楽しみ、関係の見えにくい都市システムに耽溺してきたのが、現代社会だったのかもしれない。そして今、われわれの生命が未来に持続できるのかどうか分からない不安にも襲われているようです。

しかし、このような時だからこそ、転換のチャンスでもあります。自然を肌で感じ、自然と人との関係、そして人と人との関係を問い直し、自然と共生する社会を再生する機会が訪れているのではないかと。言い換えれば、人が自然を楽しむだけでなく、自然への感謝や返礼を忘れない関係を作り直し、人、街、地域が「自然力」を身につけるべき時なのではないのでしょうか。

新潟は12000年前の縄文時代から、水と土との縁が深く、豊かな恵を受けて発展してきました。しかし、恵み豊かな土地ほど災害を受けやすいのも事実であり、さまざまな災害を受けてきました。大洪水や豪雪、そして地震も相次ぎ、天然ガスの過剰な汲み上げによる地

盤沈下、汚水の垂れ流しによる新潟水俣病という悲劇にも見舞われました。

水と土の芸術祭が着目してきたのは、こうした自然の恵と災害に付き合ってきた新潟だからこそ、水と土と取り組む先人達の記憶や知恵が色濃く残っているという点です。漁業や農業、そして治水に関する多様な知恵が生まれ、自然と共生する伝統的技術が発達し、あらゆる自然に祈り、恵みに感謝する神楽などの多彩な祭事と文化が育まれました。

このように、水と土と縁の深い新潟から「自然との共生」を考えていくことは、自然力のいかされた持続可能な都市のあり方、人間の生き方を想像し、模索する第一歩となるのではないのでしょうか。

連続シンポジウムでは、各界各層の第一人者や、新潟で活躍する多彩なゲストが様々な視点から「自然との共生」を語り合います。今年12月11日(日)には早速、第一回シンポジウム「自然との共生とは!?—3・11震災から学ぶ」をだいしホール(新潟市中央区東堀前通7)で開催します。堀川久子さんの舞踊によって開幕する第一回シンポジウムでは、大震災被災後も海と生きることを決意された「森は海の恋人」運動の提唱者・畠山重篤さん、哲学者の内山節さんによる講演や、大熊孝先生と篠田昭新潟市長等を交えたディスカッションも行われます。コーディネーターはフリー・アナウンサーの遠藤麻理さんです。第一回シンポジウムのお申込は新潟市役所コールセンター(電話 025-243-4894)へ、10月23日より受付開始です。

来年以降の第二回～第四回のシンポジウムも聞き逃せません。平成24年7月14日(土)の芸術祭開幕日には、思想家の中沢新一さん等をゲストにお迎えします。平成24年9月16日(日)には、作家・探検家のC.W.ニコルさんの講演や、宮尾農園の宮尾浩史さん、「冥土のみやげ企画」の旗野秀人さん等を交えたディスカッションを行います。最後の平成24年11月の第四回シンポジウムでは、縄文文化専門家の小林達雄さんや、「東北学」の赤坂憲雄さんにご講演いただきます。各回盛りだくさんの内容です。皆様ぜひ、お誘い合わせの上、ご来場ください。

新潟市 水と土の芸術祭推進課
貝瀬 千里 (会員)

report 06

九州・遠賀川の「鮭神社訪問」と水産資源保護法

7月下旬、九州一の河川・筑後川の筑後大堰の川ゴミ回収施設調査のために福岡に向かった。筑後大堰は改修を機会に、出水時に流れ着く大量の河川ゴミの集積施設を平成14年に設置した。この施設は、筑後大堰の施設上流部が大きく湾曲しており、北東の風により左岸側にゴミが集まる自然特性を考慮し、更に固定杭にゴミフェンスを組んだ施設であり、河川に流れ着くゴミの30～66%を回収する画期的なものである。

この度の九州訪問にはもうひとつの目的があった。それは1200年前に建てられた遠賀川にある「鮭神社」を訪問することである。遠賀川(流路61km、九州10位)は、鮭が遡上し生息する南限の河川として学術的に知られている。日本には東北や北陸地方を中心に多くの鮭を祭った神社が多数あるらしいが、「鮭神社」という名の神社は日本に3ヶ所、島根県と福岡県そしてその分社した北海道広尾町にあるそうだ。



鮭神社と「遠賀川源流サケの会」会長・青木宣人氏

鮭神社は福岡県嘉麻市の筑豊平野を潤し北九州の響灘に流れ込む遠賀川の源流に程近い場所にあった。嘉麻市役所で鮭神社の事を聞くと、「遠賀川源流サケの会」会長の青木宣人氏の電話番号を教えてくれた。早速電話し、青木会長の自宅でお話を伺った。

鮭神社に祭られている祭神は神話「海幸彦山幸彦」の海幸彦と山幸彦と女神の豊玉姫との事。遠い昔、収穫の秋に遠賀川を上って来た鮭は、嘉麻市の田畑に豊かな実りをもたらす神様の使者として大切にされ、現在も信仰の対象として鮭を食べない風習が残っている。

毎年12月13日には、無病息災、五穀豊穡を祈る「献鮭祭」が行われ、川沿いの「まないた石」の上で清められた後境内の鮭塚に奉納される。鮭が遡上しない年は、大根の縦割りにとうがらしの輪切りの目をほどこし、鮭に見立てて供えていたという。

筑豊炭田を流れる遠賀川は、炭鉱が全盛期だった昭和初期には川の汚染が進み鮭は見られなくなった。しかし、エネルギー革命により炭鉱は閉鎖され、その後地域の方々や行政の取り組みが進んだ昭和53年、遠賀川の下流で一匹の鮭が戻ってきた。これを機に魚道の整備や鮭が産卵できるような河川の整備と共に鮭の孵化と稚魚の放流活動が始まった。平成3年には9尾の鮭、20年には85cmの大きな鮭が戻ってきた。

現在新潟県三面川から鮭の受精卵を譲り受け、稚魚の育成を行い、地域の学校と一緒に3月下旬に約4万匹の鮭稚魚を遠賀川水系に放流している。

当会も6年前より新潟の鮭を信州(松本、上田)まで遡上できる河川環境を目指し、地球環境基金、三井物産環境基金の助成を受けて鮭稚魚の市民環境放流(合計98.5万尾)を、信濃川、千曲川、犀川で子供たちと一緒にやってきた。

今年は宮中取水ダムの魚道に遡上してきた鮭を捕獲し、全て標識を付けて上流に放流する画期的な調査が行われる事になった。その為長野県内の河川で、その標識を付けた鮭を見つけたらお知らせくださいということになった。



標識(目の後ろの透明部分に装着)

そこで問題が起こった。それは、長野県内で鮭を見つけた時は善意であっても触れても、捕獲してもいけない法律があることだ。水産資源保護法(内水面における鮭の採捕禁止 二年以下の懲役、50万円以下の罰金が科せられる)とか。

こんな馬鹿な法律ではあるが法律は法律として遵守しなくてはならないので、見つけたときは生きていても、死んだことにして是非お知らせください。

「鮭神社」海幸彦より

世話人 加藤 功

新潟水辺イベント情報

●新潟県政記念館 連続講演

第二回 大河津分水と歴史とその役割

日時：10月23日(日) 14:00～16:00

講演 大熊 孝

会場：県政記念館

主催：新潟県政記念館運営グループ

問合せ：新潟県政記念館 025-228-3607

kensei@pony.ocn.ne.jp

応用生態工学会 第10回 北陸現地ワークショップ in 新潟～越後平野の生物多様性 保全と再生への取り組み

期日：10月28日29日

28日(金) ワークショップ、総合検討

会場：新潟県建設会館 大会議室

交流会 レストラン「Appetit」5千円

29日(土) 現地見学会 阿賀野川及び信濃川下流

参加費：有料

主催：応用生態工学会 新潟 問合せ：025-245-3883

三人委員会片品哲学塾 2011

「ポスト3・11の日本を哲学する」

期日：11月6日(日)～8日(火)

詳細は <http://3nintetugaku.net/> まで

会場：片品村役場2階農林研修室(6日)

主催：三人委員会哲学塾・三人委員会哲学塾ネットワーク

問合せ：090-7008-2930 kitoh@k.u-tokyo.ac.jp

9 県河川愛護団体交流会 新潟大会

期日：11月12日13日

12日(土) 新潟市街地の都市河川「通船川」を見学
山ノ下閘門、貯木場、船着場を川舟で巡る
夕刻より、懇親会

13日(日) 新潟市街地の会場にて、交流会開催
昼食後、解散

主催：NPO 堀割再生まちづくり新潟

問合せ：<http://horiwari.com/>

2011 新潟水辺シンポジウム

日時：11月26日(土) 13:15～16:40

詳しくは本紙3ページをご覧ください。

景観講座 地域で取り組む魅力づくり・まちづくり in 亀田

日時：11月26日(土) 13:00～17:00

内容：各地域からの事例紹介(亀田本町通り商店街、小須戸本町通り商店街、まき鯛車商店街)、待ち歩き

会場：亀田駅前地域交流センター 3階多目的ホール

参加費：無料

主催：新潟市都市景観形成市民団体連絡協議会、新潟市

問合せ：新潟市住環境政策課景観係 025-226-2825

新潟島まちづくり人交流会

日時：12月3日(土) 18:00～20:00

内容：活動団体のアピール、情報交換

会場：ホテルイタリア軒

参加費：5千円

主催：新潟市市民活動支援センター運営協議会

申込：新潟市市民活動支援センター FAX:025-224-5075

問合せ：090-1613-1879(森本)

MAIL: toorum@rose.ocn.ne.jp

水と土の芸術祭 2012 連続シンポジウム

第1回シンポジウム「自然との共生」とは?

～3.11 震災から学ぶ～

日時：12月11日(日) 13:00～16:30

内容：

舞い「ここに在ることから」堀川久子・講演「3.11 大津波を受けて、これからも海に生きる」畠山重篤・講演「自然と人間の関係の基層—日本における自然信仰の意味」内山節

会場：だいしホール

参加費：無料

主催・問合せ：水と土の芸術祭実行委員会 025-226-2625

MAIL: mizutsuchi@city.niigata.lg.jp

編集後記：新潟市中央区西大畑にある旧齋藤家別邸は衆議院議員・貴族院議員を務めた新潟の豪商・齋藤喜十郎が大正7年(1918)年に造った別邸で、建物だけでなく庭園も回遊式庭園と呼ばれるすばらしいものである。この旧齋藤家別邸など新潟まちの歴史・文化・観光とその活性化をテーマにしたシンポジウムが昨年行われた。そこで提案されたのは、多くのまちづくり団体や個人が、自らが描く夢に向かって活動しており、それらが交流・連携することによって問題解決につながるのではないかとということであった。そこで各団体や個人の情報交換や交流の場として「新潟島まちづくり人交流会」が12月3日ホテルイタリア軒で開催される。水辺の会が活動し始めた1980年代頃は、万代島の倉庫でのオールナイト討論会などバイタリティーある人が活動しており、熱気ある時代だった。それを彷彿させる熱い会になることを期待します。 編集人：森本 利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局

〒950-2264 新潟市西区みずき野4-7-15 大熊 方 Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

●ホームページ <http://niigata-mizubenokai.org/> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員186名、法人会員8団体(2011年10月1日現在)